人権啓発ネットワーク大東機関誌　第23号　2022年3月

# ぬくもり

編集と発行　人権啓発ネットワーク大東
〒574-8555　大阪府大東市谷川１丁目１番１号
電話 072-870-0441　FAX 072-872-2268

市制施行65周年記念事業 人権週間記念のつどい

**古謝美佐子（こじゃ　みさこ）プロフィール**

1954 年沖縄県嘉手納町生まれ。沖縄民謡女性歌手。９才でレコードデビュー。
86 年より坂本龍一の CD やツアーに参加。
90 年より「ネーネーズ」にリーダーとして参加。
1995 年末脱退後ソロ活動を開始。アルバム「天架ける橋」「廻る命」は高く評価され、自作詞の子守歌「童神」は夏川りみ、など多くの歌手にカバーされ全国的に愛される。
2014 年からの「うないぐみ」では CD「うない島」や坂本龍一と共作シングル「弥勒世果報」発表。
またガレッジセールゴリ監督の映画「born,bone,墓音」（2016）「洗骨」（2019）にも出演している。

2021年12月10日（金）午後7時より、サーティホールで開催された今年の人権週間記念のつどいは、古謝（こじゃ）美佐子さんをお招きしてのコンサートでした。座席を空け、間隔（かんかく）をとるなど感染対策を徹底したうえでの開催となりましたが、およそ500名もの方が来られ、また私自身も安心して鑑賞することができました。

まずは「沖縄かりゆし会」によるエイサーの披露（ひろう）です。太鼓を鳴らしながら舞う沖縄の伝統舞踊のエイサ

ー。当日も大迫力の演奏でした。演奏だけでなく、バチの動き一つ一つにまで神経を尖(とが)らせている様はまさに「舞(まい)」で、会場からも自然と手拍子(てびょうし)が広がっていました。

沖縄かりゆし会の演舞のあとは、いよいよ古謝さんの登場です。1 曲目は石垣の民謡『島々清しゃ（かいしゃ）』。その力強い歌声にブワッと鳥肌が立つような感覚を覚えました。当日配布された古謝さんのプロフィールによると、【「古謝の声には高周波とゆらぎ成分を同時に持ち人を癒(いや)したり健康促進の効果がある」という内容の分析結果が科学者や大学教授より発表され話題となる】とありましたが、納得の歌声で一気に引き込まれてしまいました。当日はお連れ合いの佐原さんがキーボードの演奏と、曲の合間にはお二人から歌に込めた思いやエピソードなどをお話しくださり、ただその歌を聴くだけでは感じることの出来ないたくさんの「思い」や「魂(たましい)」に触れることができました。

とりわけ私が心臓をつかまれたように感じたのが、コンサート中盤(ちゅうばん)の『黒い雨』です。古謝さんは4，5歳の頃から民謡だけをずっと歌ってこられました。その中でもこの『黒い雨』だけは自ら歌いたいと思い、歌い始めたそうです。「生まれてずっと目の前に戦争があった。これが当たり前だとずっと思っていた。しかし、県外の人にはどうしても届かない部分がある。昔の沖縄のことは分からないと言われることがある。でも、この歌を歌うことで、たくさんの人が理解をしてくれる」という古謝さんのお話に、当時の、そして今もなお残り続ける戦争の爪痕(つめあと)を感じずにはいられません。古謝さんはお父様を3歳の頃に米軍基地内の事故で亡くし、父の面影(おもかげ)も全くないそうです。もし戦争がなくて基地もなければ、父は元気にいたのだろうか・・・という古謝さんのお話を私は忘れることができないでしょう。

『黒い雨』の中に【父さんこの雨なんの雨？】という歌詞があります。みなさん、黒い雨が何なのかご存じでしょうか。黒い雨とは、原子爆弾が投下された後に降った、埃(ほこり)やすす・放射性物質などを含んだ雨のことです。私は広島県出身なのですが、私がまだ学齢期だったころは戦争の語(かた)り部(べ)、特に被爆(ひばく)された語り部さんがご健在で、この黒い雨のお話も伺ったことがあります。黒い雨を題材とした絵本も出版されています。しかし、時が進むにつれ古謝さんのおっしゃるように「昔のことは分からない」と戦争の傷そのものが過去のことになっていっている気がしてなりません。果たして、本当にそうなのでしょうか。

今年の人権週間記念のつどいは、古謝さんの美しい歌声に心休まるだけでなく、「平和とは」そして「人の尊厳(そんげん)とは」ということを強く考えさせられる、とても大切な時間でした。

（レポーター：卓ちゃん）

**シリーズ**　―新型コロナウイルスと人権―　**その6**

# みんなで『希望』をつかみ取りましょう。

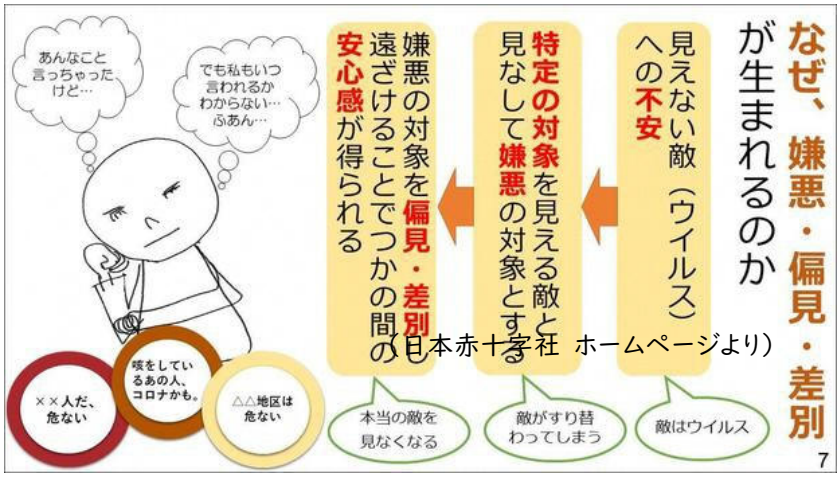
新型コロナウイルスによる感染症は、まだ世界中で感染拡大が続いています。

2020年の春から、「2週間自粛すれば」「1か月をめどに」「秋には、回復しているだろう」「来年になったら少しは…」と、手の届きそうな『希望』を追いかけては、するりと先に行ってしまう。そんな2年間ではなかったでしょうか。

今でこそ、コロナウイルスには誰でも罹患する可能性があることは、周知されてきたところですが、流行の始めの頃は、見えないウイルスへの恐怖が罹患した人を特定したり避けたり、果ては誹謗中傷したりと、「コロナ差別」ともいえる状況がありました。あまつさえ、コロナ禍によって生活の変化や経済的な困窮で疲弊している社会、人々を、さらに差別が苦しめることはあってはならないと、国や行政からの発信、学校での教育で、感染症について正しく知ること、コロナによる偏見や差別をしないという意識は、多くの人の間に広がっていったと思います。

しかし、新たな変異株が次々に登場し、見えかけていた『希望』の背中がまた遠ざかっていったときに、再び忍び寄ってくるのが『不安』や『恐怖』であり、その先にある『偏見』や『差別』なのです。

日本赤十字社のホームページから、「新型コロナウイルスの3つの顔を知ろう！負のスパイラルを断ち切るために」と題した資料を見ることができます。ここですべてを紹介することはできませんが、一部をご紹介します。



（日本赤十字社 ホームページより）

この資料では、新型コロナウイルスには、3つの感染があるとしています。

第1の感染は、「病気そのもの」です。感染すると風邪症状が重症化し、肺炎を引き起こすこともあります。

第2の感染は、「不安と恐れ」です。特に初期の頃は、新型コロナウイルスについてわからないことが多く、不安や恐れに振り回され、その結果本当に大事なことに気づく力さえ弱められてしまいます。

第3の感染は、「嫌悪・偏見・差別」です。不安や恐れから生まれるもので、人と人との信頼関係や社会のつながりが壊されてしまいます。3つの感染の負のスパイラルを断ち切るために、私たちにできることはなんでしょうか。

第1の感染を防ぐには、マスクや手洗いなどの対策を徹底すること。第2第3の感染に振り回されないためには、気づく力・聴く力を高め、確かな情報を見極めること、この事態に対応しているすべての人々をねぎらい、敬意を払うことだと、日本赤十字社の資料は締めくくられています。

長引く新型コロナウイルスとの戦いですが、前方に見える『希望』をみんながつかみ取れるように、それぞれの立場でできることを行い、負のスパイラルを断ち切れたらと思います。

（レポーター：みかん）

# 「平和なまち絵画コンテスト」受賞作品決定

平和なまち絵画コンテストとは、平和教育の更なる充実を目的として、平和首長会議が実施する絵画コンテストで、昨年度は、19 か国 99 都市から応募がありました。

本市におきましても、2021年8月に、市内の6歳から15歳の方を対象に絵画作品を広く募(つの)り、121作品の応募がありました。人権啓発ネットワーク大東の委員により、選考を行い、最優秀作品には６歳～10歳の部で池邊刀俐(いけべとうり)さん（10歳）、11 歳～15歳の部で吉村柑菜(よしむらかんな)さん（11歳）が選ばれました。

また、それぞれの部から各4作品を佳作として決定しました。

最優秀作品、佳作作品に選出された方の作品については、平和首長会議に応募を行いました。

## 池邊刀俐(いけべとうり)さん

楽しい事も、大変な事も、みんなできょう力して助け合って、だれもがえがおで毎日楽しくくらせるまちになればいいなという思いをこめてかきました。
このまちにはえい語で平和といういみのPeace という文字のたて物や公園を作って、住んでいる人たちが平和をめざしてくらせるように考えました。

## 吉村柑菜(よしむらかんな)さん

今回は「コロナがおちつくように」という願いと、日本は戦争がなくて、平和です。でも、日本以外は戦争している国もいまだにあります。なので、この２つのことで地球をハートにし、とりを２ひき入れ、さまざまな国旗を入れました。

作品については下記ホームページ（右のＱＲコード）よりご覧いただけます。

（大東市ホームページ　“平和なまち”絵画コンクール　入賞作品発表）
https://www.city.daito.lg.jp/soshiki/19/31483.html

# つながる　ぬくもり～2021 年を振り返って～

## 新型コロナ禍のもと、今こそぬくもりのある街に

**9/26（土）**
**キラリエホール**

### “平和なまち”絵画展 in 大東市

市内の6歳から15歳までの子どもたちを対象に「平和なまち」をテーマにした絵画を募集しました。100点以上が出品されました。年齢の若い子どもたちからは、「みんなが一緒に遊べる、人間も動物も楽しく暮らせる。」というメッセージ伝わり、少し年齢が上がると「障がいのある人が暮らしやすい」、「戦争で亡くなる人がいない」や「川や海をきれいに」などの作品が出てきて、12歳以上になると「紛争・貧困」をテーマにした作品もありました。12歳の子どもの作品にはこんなメッセージが書かれていました。

「私は、この何か国もある世界で、みんな違っていいと思います。ですが、みんな『平等』であるべきです。この作品を通して、世界が一つであることが伝わってほしいです。今、差別や貧困で苦しんでいる人たちが、いつの日にか少しでもいいから笑ってほしい。」

**11 月**
**動画配信**

### ひとり芝居「旅立ちの詩（うた）～彼女たちの羅針盤（らしんばん）～」

大東市男女共同参画啓発事業として、サーティホール多目的小ホールで無観客での収録を行いました。谷ノ上朋美さんの一人芝居です。同窓会の場面を一人で何役も演じきる谷ノ上さんの表現力は圧巻でした。その中で、容姿コンプレックス、デートDV、虐待などつらい経験を語り、また、友人も性的指向や不妊で悩んでいる、そんなやりとりがありました。「ありのままでええやん。今の自分を受け入れることから、前に進むしかないやん。」このセリフに演者の強いメッセージを感じました。

**12/10（金）**
**サーティホール**

### 市制施行 65 周年記念事業　人権週間記念のつどい
### 古謝（こじゃ）美佐子コンサート～平和への祈りをうちなーの唄にのせて～

サーティホールにおいて、大東市内にある、沖縄県出身者を中心とした親睦団体「かりゆし会」による伝統文化「エイサー」の演舞と古謝さんの歌とお話がありました、コロナで制限をした定員上限のおよそ500名の参加があり、大盛況でした。

古謝美佐子さんの力強い歌声にブワッと鳥肌が立つような感覚を覚えました。特に古謝さんの思いが込められた「黒い雨」という歌には感動しました。3歳のとき、父親を沖縄基地の事故で亡くした古謝さんは平和への思いが強く、聞く人を感動させずにはいません。「平和とは」そして「人の尊厳とは」ということを強く考えさせられる、とても大切な時間でした。

# 「命」について考える

## ～ 一人ひとりの少しの行動が、救える「命」があります ～

昨年、２度目の東京オリンピックが開催されました。たくさんのメダルを期待されていた水泳の池江選手が、急性白血病を患(わずら)い、復活のため奮闘(ふんとう)され、今でも記録を伸ばし続けているニュースは、多くの人々に驚きと感動を与えてくれました。

私にも、身近に血液の病気を患い、奮闘されている方々がおられます。また、私自身は数年前にドナーとして骨髄(こつずい)を提供した経験があります。そんな私の立場から、「命」について考えてみようと思います。

実は、注射が怖くて献血(けんけつ)もしたことがなかったのですが、10 年ほど前に大東市で催(もよお)された「骨髄バンク」の啓発(けいはつ)企画に、友人に誘われ、ほんの軽い気持ちで参加しました。

企画後、（今思うと赤面ものですが、）「痛いのはイヤなので無理！」と言う私に、過去に移植(いしょく)を受け命が助かったＳ(エス)さんは、「絶対納得しないうちは、登録はしないで下さい。」と笑っておられました。「美味(おい)しいビールが飲めるのも、ドナーさんの骨髄提供があったから。死んでいた命だから、これからは一人でも多くの人に、骨髄バンクのことを知っていただく活動をする。」「移植を待つ子ども達は、とても辛(つら)い検査に歯を食いしばって耐(た)えている！その子達のためにも僕は頑張る！」と語るＳさんの目は優しく、そして、厳しく光っていました。

では、（無理をしない範囲(はんい)で、自分には何ができるのだろう？）と考え、職場の皆さんに知ってもらう企画を催(もよお)すことにしました。当日は、骨髄バンクの説明員の方と共に、小学生の女の子も母親と一緒に来てくれました。その少女は、再生不良性貧血(さいせいふりょうせいひんけつ)という病気で、一年前に５歳の弟から骨髄移植を受け、再びの命を得たとのことです。たまたま弟と白血球の型が合ったから良かったものの、他にもたくさんの方々が、型の合うドナーを待ち続けていること、そして、ドナー登録のためには、少しの血液を採(と)られるだけであることを、あらためて知りました。

次に、自分にできることは？（注射が怖くて登録できない？この少女を前にして、大のオッサンが何を恐れる！）と、私なりに勇気をふりしぼり、保健所でドナー登録をしました。

数か月後、突然「適合(てきごう)」の通知が届きました！正直かなり動揺(どうよう)してしまいました。素面(しらふ)では封筒(ふうとう)を開(あ)けることすらできませんでした。かなり迷いながらも、その少女が頭に浮(う)かび、次のステップに進む手続きをしました。それからは、手術への不安と、（自分の不注意で病気やケガをして提供できなかったら…）という心配の日々が始まりました。

しかし、骨髄バンクの担当者さんはじめ、皆さんの心遣(こころづか)いと、よく練(ね)られたステップを通して、何が行われるのか、リスクも含め一つひとつ納得していきました。徐々に覚悟(かくご)と確信が生まれ、当

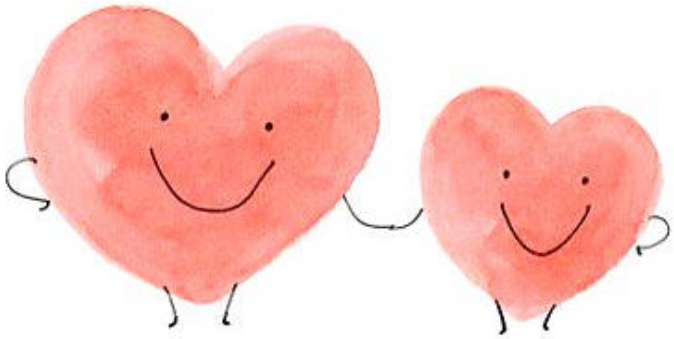
日は安心して手術に臨めました。幸運なことに私の手術はかなり楽で、その日の病院食を完食し、退院の日から仕事をしたほどでした。そして、気が付けば、私の注射嫌いもどこかに吹っ飛んでいました。

振り返ると、我ながらよくやったと思います。患者さんのご苦労に比べれば大したことでもないのでしょうが、「命」というものに対して精一杯をやり切った達成感がありました。

今なぜ、このお話をさせていただいているかには、二つの理由があります。

一つは、昨年 55 歳になった私は、骨髄バンクのルールにより、もう他人には骨髄を提供することができません。そんな私にできることは、この体験を伝えていくことだと思いました。

もう一つは、私が催した職場の企画に参加してくれた人が、よりによって急性白血病で急逝してしまったこと。そして、私がドナー登録をするきっかけとなった少女（今は成人されています。）の病気が再々発し、もう弟からも骨髄提供を受けることができなくなったと知ったからです。今は看護師をめざす彼女。ドナーからの提供を受けない限り、命を全うすることが難しい状況にあります。この「理不尽」に、今の私ができることを考え、この場をお借りして書かせていただきました。



皆さんにお願いがあります。これをきっかけに、まずは知っていただきたいです。そして、今のご自分に何ができるのかを考え、納得できる無理のない行動を開始していただければと思います。そうすれば、一人ひとりの少しの行動が重なって、「命」を待っている「あの人」に、届くことができると信じています。

（レポーター：あき）

**骨髄移植とは**

白血病等の病気によって、正常な造血が行われなくなってしまった患者さんの造血幹細胞を、健康な方の造血幹細胞と入れ替える（実際はドナーから採取された造血幹細胞を点滴静注する）ことにより、造血機能を回復させる治療法です。

**骨髄バンクとは**

骨髄バンク事業は、国（厚生労働省）主導のもと、骨髄移植推進財団が主体となり、日本赤十字社および地方自治体の協力により行われている公的事業です。

ＮＰＯ法人関西骨髄バンク推進協会は、その骨髄バンク事業を支援するボランティア団体で、大阪府、大東市などの委託を受け、ドナー登録推進事業などを行っています。

# 人権啓発ネットワーク大東とは

近年、子ども･障がい者・高齢者等への虐待や特定の民族に対する憎悪表現など多くの人権問題がニュース等で取り上げられています。社会環境が大きく変化し、まだまだ「人権」が尊重されていない状況が現在の日本には存在しています。
大東市では、人権尊重のまちづくりをめざし、市民による市民のための自主的な組織として「人権啓発ネットワーク大東」が 2013 年４月１日に設立しました。

## 目的

一人ひとりが生まれながらにもっている基本的人権が尊重される社会の実現に向けて歩み続けるため、自らの人権意識を高め、お互いの人権を認め合うとともに、わたしたち市民が行政と協力して、人権啓発活動を積極的に行い、人権尊重のまちづくりをめざす。

## 活動内容

・自らの人権意識を高めるための研修会などへの参加・参画。
・人権尊重の理念を広く市民に広げるための啓発・広報活動など。

## ☆入会案内

「このまちをよりよくしたい。そのために何かをしたい。でも何をしていいかわからない…」というあなた！お互いの人権を認め合い、地域の発展、人権尊重のまちづくり、そんな社会の実現に向けて、一緒に活動しませんか？

※詳しくは大東市ホームページ（http://www.city.daito.lg.jp/）に掲載していますのでご覧ください。

※「人権啓発ネットワーク大東」の Facebook も開設！
様々な活動の報告や、ほっとひと息いい話といった人権に関する小話など情報発信していますのでこちらもぜひご覧ください。
（https://www.facebook.com/人権啓発ネットワーク大東-1987405014833313/）

**入会等の申し込み･問い合わせ**

人権啓発ネットワーク大東事務局（大東市人権室内）
〒５７４－８５５５
大東市谷川１丁目１番１号
ＴＥＬ:０７２－８７０－０４４１
ＦＡＸ：０７２－８７２－２２６８
Ｅメール：j_keihatsu@city.daito.lg.jp